「不思議な出会い」

目を覚ますと、視界の中にぼんやりと焦げ茶色の世界が広がっていった。意識と同じように半開きのまぶたの先に映る光景を、男は何も考えずただただ眺めていた。時折茶色の世界に白と黒の色が見え隠れしている事に気付くと同時に視界が明瞭になっていき、それに伴って意識は濃い霧が霧散するように男の元へと戻ってきた。

頭上の障子越しに廊下の窓から光が降り注いでいる。目が眩むほどでもないちょうどいい日差しを茶色の世界に加え、次に額と後頭部、首筋の冷涼感に気付いた。頭は動かさず左手だけでそれぞれの部位に触れていく。手ぬぐいのような抵抗の少ない布が額に置かれ、それよりも二回りほど大きな布が首から頭頂部までの範囲で、枕の上に乗せられているのか頭の下に敷いてある。その確認の途中で、後頭部付近に芯に響く鈍痛が残っている事を

男は認識した。

夜じゃない。額の上の湿った手ぬぐい。見上げる天井。白と黒。鈍痛・・・。そう流れるように思考が展開した直後、男は片膝を立て勢いよく上半身を起こした。

「ひゃあぁ！」

右手で掛け布団を剥ぎ取り、その体勢で記憶の水位を上げていく。断片的な記憶の段差に辿り着くとその一面を記憶が満たし、ようやく現実と意識が一致し始めた。

（そうだ、昨日わたしは・・・。）

いつからそうなっていたのか衣服の下は汗にまみれ、不快感と寒気が触覚を刺激している。

はだけた右の太腿に落ちた手ぬぐいが内側の血管を収縮させ、忙しなく男の思考に情報がなだれ込んでくる。こめかみに添えていた右手を離し、男は今自分がいる場所へと視線を走らせる。

押入れ、畳、襖、天井、襖、畳、日差し、隣の部屋、人。男は開け放たれた襖の先にい

る誰かと目があった。部屋と部屋の境界線に、こちらを侵害しないように控え目に距離をとった形で背中を向けていたその人物が、上半身だけを捻り男と同じような表情でこちらを見つめていた。

異様な光景だった。素性も知らぬ二人がそれぞれ恐怖をその眼に宿し、安堵を頬に湛えながら見つめ合っている。男は申し訳なさそうに頬を伝う汗のしるべに助けられ、思い出したかのように鼻から大きく息を吐き、肩で息を吸った。その微動に対峙する人物も気付いたのか、男の視線から徐々に相手の視線が下の畳へと移動していく。男は喉を鳴らし唾をゴクリと胃へ流し込んだ。

（昨日隣の部屋にいた人か？）

男は頭の中でそう自分に問いかけてみるが、むろん返事は返ってこない。スースーという鼻息がやけに耳に響く。今視界に捉えている女性、というには幼い面影を全身に纏う女の子が何者なのか、完全に視線を外されている

今、男は少しずつ平静を取り戻し始めていた。

右手に掛かっていた己の体重で右手が痺れはじめた頃、男は体勢をあぐらに変え背中を丸めて一度自分の思考の中へと籠ろうとした。

すると、「ひゃっ！」という小さな悲鳴が聞こえ、驚いて顔を上げた男と女の子は再び視線を交える形になった。

「ご・・ごめんなさいっ！すいません！」

のっそりとした男の動きに危機を感じたのか、後ずさるような体勢の中目だけではなく顔全体に恐怖を貼り付けている。交わっていた視線を遮るように女の子は左手で目を隠し、右手をこちらに伸ばし無言の拒絶を示した。伸ばした右手の指先が小刻みに震えているのがこの距離からでも分かる。男は徐々に強く脈打っていく鼓動をしっかりと感じながら、その規則的な鼓動の僅かな合間に生じた余裕を行使することにした。

「き・・きみは・・、」

思っていたより半分も喉が振動せず、掠れた

弱々しい声に自分で驚き一度言葉を引く。喉に絡んだ何かを喉元だけに強く振動を起こすことで取り除く。

「すいませんっ！ごめん、ごめんなさい！」

その音に反応して先程よりもより強く懇願するように女の子が空間を揺する。

「君は、いったい誰なんだい、」

「ごめんなさい。謝りますすいません！だから怒らないでくださいっ！すいませんっ！」

上から掻き消すように女の子が叫ぶ事で、男は自分がまともに発声できているのかを実感する事ができない。

「君はなぜここにいるんだい、」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。」

「違うっ。わたしは別に怒ってなんて、」

「お願い、怒らないでください！おねがいします！怒らないで。」

空間を包む恐怖と暴力的な雰囲気に呼応するように男の鼓動は早くなり、腹の底から嫌悪感が喉元へと一気に逆流してくる感覚を覚え

た。滝のような冷や汗は上昇した男の体温に触れて蒸発したように、衣服の内側から蒸気となって吹き出しそうなほどだった。

（やめないかっ！！）と男は発っしようとしている自分に気がつき、寸でのところでその言葉を飲み込んだ。押し込まれた空気の塊が鎖骨の辺りで何とも言えない痛みを残し消えていく。男は咄嗟に左手で目元を覆い右手を伸ばし、無理矢理現実から逃避した。

再度異様な光景が続いた。お互いに同じような体勢をとりそのまま動かない二人。それぞれが全身で呼吸をするように身体を上下させている。締め切った障子や襖に遮られて風は室内まで入ってこず、吐いた息は空中を漂うことなくそのまま足下に落ちていく。混乱する男の頭の中には、纏う衣の感触等といった情報までもが止まることなく流れ込んできていた。

静寂がしばらく室内に鳴り響いていた。男はゆっくりと伏せていた顔を上げ深く息を吐

いた。

（昨日わたしは隣の部屋へ行こうとして発作を起こして、そして誰かに後ろから頭を殴打されたんだ。これは、夢じゃない気がする。感じる感覚は全て現実そのものだ。だとしたら、このままここにいていいのか？訳も分からずこの部屋に案内された。拉致されたのか？人質？それか・・生贄？とにかく一度ここを離れた方がいいかもしれない。だとしたらあの子も。）

冷静になった脳内から導き出されたユーモアの欠片もない考えに男は僅かな焦燥を見せ、物音一つ立てない隣の部屋の住人へと顔を向けた。

女の子は体育座りの格好になり膝に顔をうずめ、それを両手で覆っていた。黒の長い髪の毛がそれらを更に上から覆い、表情どころか皮膚の肌色さえ隠してしまっている。男の目には無防備な格好によって露わになっている下着が映り、すぐさま視線を外し左手の押

入れの無機質な白色で視界を満たした。一瞬ではあったが目に焼き付いた映像が、その無機質な壁に投影されていく。視線を足下に移し、強い何かで後方に引かれる眼球や首を屈服させ汗を拭った。

　そのまま相手が怯えないようにできるだけ静かに最小限の動きで立ち上がると、背中越しに相手が微かに動く衣擦れと畳との摩擦音が聞こえ、男は数十秒その場で次の動作に移らず立ち止まった。弱そうな空手家の構えのような中途半端な位置で両手も動かさず、必要以上に呼吸も丁寧に行った。

　先に視線を右側に寄せその後に首を後方に向ける。九十度首を捻り肩と顎が平行になると、視界の端に先程よりも膝から下だけを大きく八の字に開いた女の子が映った。何度目か分からないが男は大きく息を吐き、目線を女の子から入口の襖へと移動させ、目の前に映る景色だけに焦点を当てながら動きそのまま部屋を出た。

後ろ手に襖を閉め、襖越しに女の子が座っていた場所を見つめる。鼻から軽く息を吐き、意識を今自分が立っている場所へと向けた。

建物の構造は至ってシンプルに作られていた。建物の入口をくぐると目の前に大きな階段が据え付けられ、最上階まで大きな吹き抜けになっている。一階には左右に受け付けのような場所と先に続く廊下や扉がいくつもあり旅館を彷彿とさせるのだが、男の部屋のある二階には吹き抜けの階段を上がると口の字型に廊下が巡り、客間を思わせる襖がいくつもあるだけで閑散としている。四隅のさらにその先には廊下が伸びているのだろうが、照明や電球は点いておらず暗闇にしか見えなかった。

郊外にある大型の商業施設、はたまた巨大な監獄や刑務所。脳裏に様々な引用が湧きおこるが、やはり旅館や宿というのが男の中では一番納得できる例えだった。男は目の前の木でできた柵に手をかけ吹き抜けを見上げる。

初めてこの建物を見た時から生命を感じていたが、今こうして見上げる内部の構造は、男には人体の内側のように見えて仕方がなかった。自分以外誰も廊下を歩いていない。階段にも見下ろす一階にも誰一人いない。

温かみと不気味さを醸す廊下を歩き、男は階段へと辿り着いた。一段一段の段差が高く上りにくいと感じていた昨日の事を思い出す。

手摺り沿いに廊下を曲がり階段を見下ろして男は驚いた。昨日よりも明らかに段差の高低が変わっている。その差の分の段数も確実に増えている。

（やはりこれは夢なのか？）

自然と胸元の布を前後に動かし風を送り、急激な喉の渇きに僅かな唾液で喉を鳴らす。

男は上りよりもゆっくりとした動作で一階に向け階段を下りていった。昨日まで身に纏っていた衣服が、すっかりと別のものに変わっている事には未だ気付いていない。

続く